

## 生駒市の子育て支援事業「サンデーひろば」における ボランティア学生の学び

Student Learning Acquired through Child-Raising  
Support Program “Sunday Hiroba” of Ikoma City

岡澤 哲子\*

Tetsuko Okazawa

本研究は、地域の子育て支援事業である生駒市の事業「サンデーひろば」への学生派遣に際して、ボランティア・スタッフとして継続的な学生の参加を促進する手だてと、参加した学生にどのような学びの特徴があるのかを明確にすることを目的とした。参加した学生が毎回の事業後に記入した振り返りシートの分析結果から、学生の継続的参加を促進する手立てとして、ボランティア活動内容の魅力を高め、活動の中で学生が主体的に目標や役割をもつことが必要であり、自己評価をする比較対象に出会える多くの体験すなわち年間継続参加と4年間継続参加をすることが親子への理解や関わり方の視点に関する深い学びにつながると考察された。

### 1. はじめに

生駒市と帝塚山大学は平成17年10月から学市連携の協定を結んでいる。その協定のもと、生駒市の子育て支援事業のひとつとして実施している「サンデーひろば」に帝塚山大学のボランティア学生が継続参加してきた。平成26年度からは保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の養成を教育の軸としているこども学科の学生だけの参加となっている。そのため、生駒市の保護者の子育て力向上とその支援という目的と、こども学科の子育て支援者の養成という目的が合致したところにこの事業のねらいが絞られてきている。

「サンデーひろば」は、4月を除いた月に1回おおむね第1日曜日の午前中に2時間開催される年間11回のプログラムである。市民対象のチラシは図1の通りである。対象は就学前の子どもとその保護者等である。生駒市立中保育園の保育施設を利用し、園庭での戸外遊びや、保育室での室内遊びを楽しむことができる。戸外には、砂場・ブランコ・すべり台等の遊具があり、室内には、大きいブロックやぬいぐるみなどのおもちゃが準備されている。スタッフは、生駒市の保育士・保健師・看護師がおり、保護者が子育てに関する相談もできるように配慮されている。そこに帝塚山大学の学生がボランティアとして参加している。また帝塚山大学こども学科の教員も参加している。申込み不要で無料のため気軽に参加できる。参加者は、母親と子ども、父親と子ども、両親と子ども、祖母と子ども、祖父母と子ども、など様々である。子どもは3歳未満の未就園児が多いが、3歳から5歳の就学前の子どもや小学校低学年の子どもも参加することもある。

---

\* こども学科 教授

図2の配布資料を基にサンデーひろばの説明と参加を促す生駒市の職員によるボランティア学生募集の説明会があり、それに学生が申し込みをしてボランティア登録者としての手続きがなされる。ボランティア学生は毎月全員が参加するわけではなく登録者の中で希望者が参加する。ボランティア学生は、保育士等が見守る中、戸外、室内での自由遊びの時間に子どもたちの遊びが広がるような関わりを行ったり、保護者の方と子どもと共に遊んだりする。そして、自由遊びの後は保育室内での共通遊びがあり、その時間の指導案作成と保育は主に生駒市の保育士が行うが学生が実施する月も設けてある。

平成27年度  
あつまれ みんなの  
サンデーひろば

生駒市子育て支援総合センターでは、日曜日に就学前のお子様とその保護者を対象に、保育士やボランティアによる保育施設を利用した園庭や室内でのあそび、保護師や看護師による子育て相談などを行っています。幼稚園・保育園に通う園児も参加できます。

**場 所** 生駒市立中保育園  
お車でおい越しの方は市役所東側駐車場をご利用ください。公共交通機関をご利用の場合は生駒駅下車徒歩5分。

**開催日と時間** いずれも第1日曜日の午前9時30分～11時30分  
4月はお休み。5月・1月は第2日曜日に開催。雨天の場合も実施(時間内で自由参加)  
※午前7時30分現在、生駒市に避難発生時は中止

<下記の日程で行います>

平成27年 5月10日	6月7日	7月5日	8月2日	9月6日	10月4日
11月1日	12月6日	平成28年 1月10日	2月7日	3月6日	♪☆☆☆♪

**対象者と参加費** 就学前の子どもとその保護者・無料(申込不要)  
(季節に合わせて、お茶など各自ご持参ください)

問い合わせ  
★子育て支援総合センター 支援係  
☎ 73-5582  
★生駒市立中保育園  
☎ 74-5570

図1 市民向けチラシ

左記の内容の「サンデーひろば」で  
学生ボランティアしませんか？

**説明会のお知らせ**  
日時：4月16日(木) 12:20～(約30分)  
場所：18311  
説明していただく方：  
生駒市子育て支援総合センターの先生  
生駒市指導主事先生  
★御昼ご飯を食べながらになることはご了承していただいています。しかしながらマナーをわきまえてください。  
★その場で申込書を渡します。

左記の事業は生駒市と帝塚山大学が提携している事業です。就学前の子ども達や保護者と関わる経験ができます。  
上記の日時に生駒市の方が説明会に来てくださいますので、興味ある人はまず聞きに来て下さい。2年生以上で昨年度参加した学生で、今年度も継続したい人でも、再度申し込むことになるので必ず説明に参加し申込用紙を受け取して下さい。

連絡先・問い合わせ先  
こども学科 岡澤智子  
岡澤研究室(18号館3階体育室前)  
tokaz@tezukayama-u.ac.jp

図2 説明会の配布資料

そして、終了後のミーティングでは生駒市スタッフからの指導時間が設けられている。このように、この類の事業での学生の学びを促進する条件の一つとして竹之下ら(2011)が述べる「有能で理解ある広場スタッフの介在」を「サンデーひろば」は持っており、学生が子育て支援に関する体験ができる環境が整えられていると考えられる。

しかし、例年1年次では多くの学生が登録するが、学年が上がるにつれて再登録しない学生が増えていく現象が見られる。また、第1回目の5月から夏休みまでの前期期間中は参加人数が多いが、10月以降は前期に比べると参加人数は半分ほどになり、そこから徐々に減少していく。その参加者の変動の要因としては、学生の興味関心の変化、進路の変化、時間割、学外実習や定期試験等の大学行事の日程等が考えられる。しかし、子育て支援へのボランティア参加は継続することでより主体的な学びになると考えられるので(岡澤ら、2016)、できるだけ継続的な参加が促進されるような手だてを探ること、またサンデーひろばでの体験から学生がどのように何を学ぶのかを明確にすることが必要である。そこで本研究は、サンデーひろばにボランティア・スタッフとして継続的参加を促進する手だてと、参加した学生がどのように何を学んでいくのかを明確にすることを目的とした。

## 2. 方法

- 1) 時期と対象：平成 27 年度の 11 回のサンデーひろばに参加した帝塚山大学登録学生 41 名（1 年 18 名、2 年 16 名、3 年 7 名：46 名登録中不参加の学生 5 名）
- 2) 振り返りシート：毎回のボランティア終了後に振り返りシート（図 3）に記入を求めた。

「サンデーひろば」学生ボランティア 振り返りシート		月 日					
学籍番号 _____ 氏名 _____ 男 ・ 女							
【本日の自分の目標】		【本日の感想】					
【本日の活動内容概略】							
前半							
後半							
<p>【本日関わった親子】・・・わかる範囲でよい・子どもの年齢等の書き方はどれを選んでもいい</p> <p>★子ども： _____ 歳 _____ ヶ月 性別 男児 ・ 女児 （○をつけてください）</p> <p>子ども： _____ 歳 _____ ヶ月 性別 男児 ・ 女児 （○をつけてください）</p> <p>子ども： 年長・年中・年少（○をつけてください） 男児 ・ 女児（○をつけてください）</p> <p>子ども：（ ） 年生 男児 ・ 女児（○をつけてください）</p> <p>★保護者： 母親・父親・両親・祖母・祖父・祖父母 （○をつけてください）</p>							
【振り返り】							
	1 から 12 までの問いに対して 当てはまる 1～6 の番号を○で囲んでください	非常に よくできた	かなり できた	やや できた	やや できなかった	かなり できなかった	全く できなかった
1	本日の目標としたこと	1	2	3	4	5	6
2	子どもの興味や関心を理解すること	1	2	3	4	5	6
3	子どもの年齢にそって遊ぶこと	1	2	3	4	5	6
4	子どもの言うことばを理解すること	1	2	3	4	5	6
5	子どもに対してことばかけをすること	1	2	3	4	5	6
6	子どもと視線を合わせてコミュニケーションをとること	1	2	3	4	5	6
7	子どもの目線にあわせたかわりをする	1	2	3	4	5	6
8	子どものしている行動の意味をよみとること	1	2	3	4	5	6
9	子どもと積極的にかかわること	1	2	3	4	5	6
10	保護者と会話すること	1	2	3	4	5	6
11	子どもと楽しいかわりをする	1	2	3	4	5	6
12	子どもに対してその場にあった援助をすること	1	2	3	4	5	6

図 3 振り返りシート

## 3. 結果と考察

### 1) サンデーひろばの内容

平成 27 年度のサンデーひろばは、5 月から 3 月までの全 11 回開催された。9 時 30 分から受け付けを開始し、戸外または室内での自由遊びの後、10 時 50 分頃から、共通遊びとして保育士または学生が手遊びやふれあい遊び、絵本やエプロンシアター、パネルシアター等のお話、体操、製作等の企画を行い、11 時 30 分ごろ終了とした。親子を見送った後、片付とそうじをした。その後ミーティング(反省会)を行い生駒市のスタッフの指導助言があった。その後振り返りシ

トに記入をした。各月の内容は次の通りである。

(1) 5月の内容

保育士企画による共通遊びは、導入としてふれあい遊びを行い、緊張をほぐしたり、雰囲気や和らげたりした。そして、紐通しや布絵本などで手、指を使った遊びを行った。最後に「はらぺこあおむし」のペープサートでお話を楽しみ集中する時間を作り、落ち着いて活動を終えた。

(2) 6月の内容

保育士と学生が共同で企画した。初めに学生が、導入で梅雨の話をし「あめふりくまのこ」の歌を歌いながら、ペープサートも同時に楽しんだ。次に、手作り大型絵本「てるてるぼうず」の読み聞かせをした。続いて保育士が、大型絵本「ぴょーん」の読み聞かせ、「バナナくん体操」、エプロンシアター「アンパンマンとおおきなにんじん」を行った。さらに、食育の簡単な取り組みについても話をする事で、保護者にとって学びあるものとなるような工夫をした。帰り際には、学生が事前に作成してきた「おりがみかえるくん」をプレゼントとして渡し、次回にも期待を持てるようにして終えた。

(3) 7月の内容

学生企画として、外遊びからの気分整理のための「がりがりかき氷」の手遊びをし、親子遊び「ぴったんこゲーム」を通して親子で触れ合い遊びを楽しんだ。みんなで「きらきらぼし」を歌い、絵本「ふうせんくまくん」の読み聞かせをした。最後に、製作あそび「たなばたの吹き流し」を作って遊んだ。全体を通して、7月の行事である七夕を知り、季節を感じられるように計画した。

(4) 8月の内容

保育士企画により、導入で「あたま かた ひざ ポン」「ペンギンさんのやまのぼり」「さかながはねて」「だるまさんが転んだ」「ばすにのって」「きゅうりもみ」の手遊びや触れ合い遊びを行った。次に、パネルシアター「しゃぼんだまとぼせ」を行った。

(5) 9月の内容

保育士企画により、ふれあい遊び「おはようげんき」「だるまさんがころんだ」「かまきりマッサージ」を通し戸外での活動から室内での活動に切り替えられるように気分整理をした。体を動かす遊び「まわせまわせ体操」「ばななくん体操」とおはなしシアター「さんびきのこぶた」を行った。

(6) 10月の内容

保育士企画により、「幸せなら手をたたこう」を行い、「どんぐりころころ」「おおきなくりのきのしたで」「むすんでひらいて」「いっぽんばしちょちょ」「つんつんつん とんとんとん」などの手遊びやふれあい遊びを行った。次に学生手作りのおもちゃを数種類紹介し一緒に遊んだ。

(7) 11月の内容

保育士企画により、おはようのうた「みんなでおはよう」「ひとりじゃないさ」を歌った。次に秋の歌「どんぐりころころ」「大きな栗の木のしたで」「まつぼっくり」をテンポを速くしたり遅くしたりして歌った。そして、パネルシアターの導入として「おやゆび こゆび」「げんきいっぱい ハイポーズ」「たこやきくんと たいやきくん」を行い、パネルシアター「あきのかばん」「ポンポンポケット」「こんこんこななかお」を行った。親子のふれあい遊び「U F Oがやってきた」「ひつつきもつつき」「せとぎわ」の後、パネルシアター「かきの木マン ～モモリーヌ姫を助けるの巻～」を行った。



## (8) 12月の内容

学生企画により、「からだがピアノになっちゃいました」のふれあい遊びで気分整理を行った。クリスマス気分を味わえるように、靴下の手品、ハンドベル演奏（「あわてんぼうのサンタクロース」、「ジングルベル」）を歌った。次にパネルシアター「森のクリスマス」を行った後、学生が扮装したサンタクロースが登場してプレゼントを渡した。そして、そのプレゼントに製作として親子でシールを貼って終了した。

## (9) 1月の内容

保育士企画により、手遊び「アンパンマンがおでかけ」「ハッピーバースディアンパンマン」「大阪にはうまいもんが」「りんごころころ」「おおきくなったらなにになる」を行った。そして人数が多くても見やすい大型絵本「ぴょーん」の読み聞かせ、エプロンシアター「大きなかぶ」を行った。

## (10) 2月の企画

保育士企画により、手遊び「ぱん！ぱん！ぱん！」「しょうぼうじどうしゃ」「おやつたーべよ」、リズム遊び「ぶりぶりロックンロール」を行った。そして、パネルシアター「アンパンマンのはてなれっしゃ」、ふれあい遊びで「おにぎりギュっぎゅっぎゅっ」「おもちつき」「いらっしゃいまっせ」を行った。そして最後に大型絵本「ぞうくんのさんぽ」の読み聞かせを行った。

## (11) 3月の企画

保育士企画として、手遊び「とんとんとん アンパンマン」「パン工場がありました」「りんごころころ」を行い、親子で楽しめるふれあい遊び「くつついた」「U F Oがとんできた」「バスにのって」を行った。次にエプロンシアター「まあるいたまご」を行った。

## 2) 参加者数の変化

平成27年度の参加家庭数と学生参加者の変化を図4に示した。

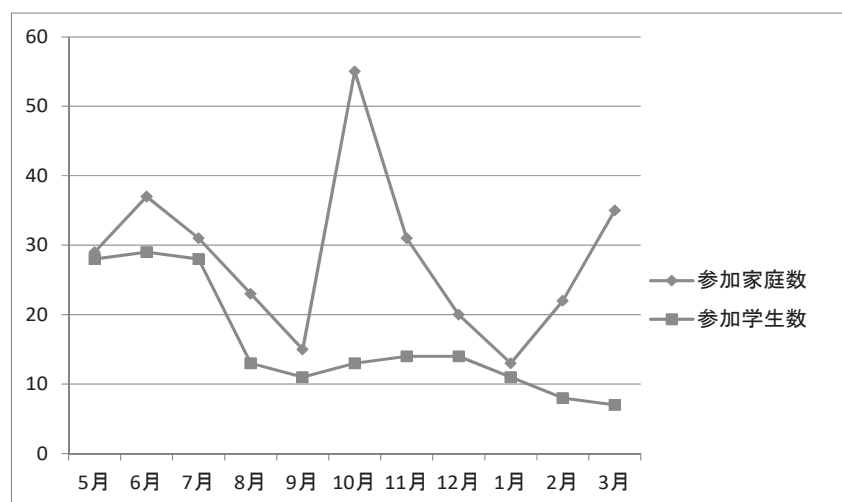


図4 参加家庭数と参加学生数の変化

初回から7月までは家庭数も学生数も多いが、8月9月にかけて減少した。10月が最高の参加家庭数であり、天候の良い秋には多く、寒くなると減り、温かくなるにつれて増えてくる傾向を示している。しかし、参加学生数は秋から特に大幅に増えることはなかった。8月と9月は、大学の前期定期試験と夏季休暇、学外実習が減少の原因であると考えられる。2月は後期定期試験

験、3月は春季休暇や学外実習があった。しかし、参加家庭数が多く良い機会であるのに、特に大学行事等の影響がないと思われる10月や11月で参加学生が大幅に増えなかった。その要因を明確にする必要があると考えられる。

### 3) 振り返りシートの分析

図3の自己評価シートの12の設問の回答合計を参加回数で割った平均を、個人自己評価得点として算出した。算出前にシート内の6段階評価の数字を変換して算出した(1→6、2→5、3→4、4→3、5→2、6→1)。統計処理はSPSS Statistics 22を用いた。

#### (1) 学年別自己評価得点の比較

学年別の自己評価得点を示した(図5)。一要因分散分析の結果、有意差があり( $F(2) = 3.841$ 、 $p < .05$ )、多重比較の結果1年生と2年生の間に1%水準で有意差があった。すなわち、1年生より2年生の方が自己評価得点は高かった。3年生は2年生より自己評価得点が低かったが、有意差はなかった。

学外の子育て支援事業に参加した学生の学年別自己評価の違いに関して、小山ら(2013)は、1年次に比べて2年次に平均値が低くなる項目の中で「保育の基盤」の観点のうち「保育の視点の学び」「題材判断の視点」に有意差があったと述べている。本研究の質問事項と小山ら(2013)の質問事項は異なっているが、小山ら(2013)の結果と異なり、本研究では2年次に自己評価得点が高くなった。本研究の対象者の2年生では、まだ保育の基盤に関する力不足に気づけず自己を過大評価している可能性がある。また、本研究では3年生は保育所実習や教育実習(幼稚園・小学校)での実習を終えた学生もいることから、実習前後の自己評価の変化を示した伊藤(2016)の研究と同様、できなかったことや自分への課題を見出すことができるようになるため、自己評価得点が2年生より低くなったのではないかと考えられる。

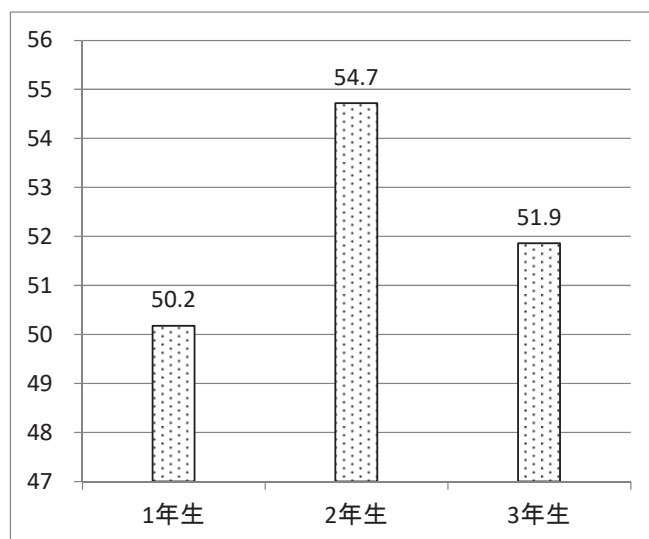


図5 学年別自己評価得点の比較

#### (2) 参加回数別自己評価得点の比較

参加回数別の自己評価得点を示した(図6)。統計処理では、1回参加、8回参加、9回参加者は1名であったので多重比較を可能にするために分析対象から除外した。一要因分散分析の結果、有意差はなかった。

1 回しか参加していない 1 名の学生の自己評価が低いのは、2 年生になって初めて参加した学生であったので、不安を大きく抱いているためだと考えられる。2 回だけ参加の学生の自己評価得点は高いが、3 回参加の学生から 5 回参加の学生に向けて高くなる、しかし、6 回から参加回数が増えるにしたがって、自己評価平均が低くなっている。この結果は、川瀬ら（2009）の継続した事業に参加した学生の自己評価が最終的に高まったという結果と異なる。異なる理由は、川瀬ら（2009）が対象としている事業への学生の参加が希望者ではなく、継続して同じ学生が参加しているからではないかと考えられる。本研究の対象である事業「サンデーひろば」では、参加が希望者のみである。サンデーひろばにおける多数回参加の学生の自己評価平均が低くなっていく理由として、次のことが考えられる。参加回数を重ねるごとに視野が広くなり、評価の比較対象が広がってくるからではないか。生駒市の様々なスタッフや上級生と自己を比較することにより、自分ができなかったことが見えるようになったのではないか。すなわち、はじめは自己を過大評価しているが、様々な体験を通して、自己を適切に評価できるようになったと考えられる。川瀬ら（2009）が対象としている事業のように、今後学生が毎回参加できる手立てを設定すれば、自己の力不足への気づき終わらず、本当に自己評価を高めるところまで達することができるのかもしれないと考える。

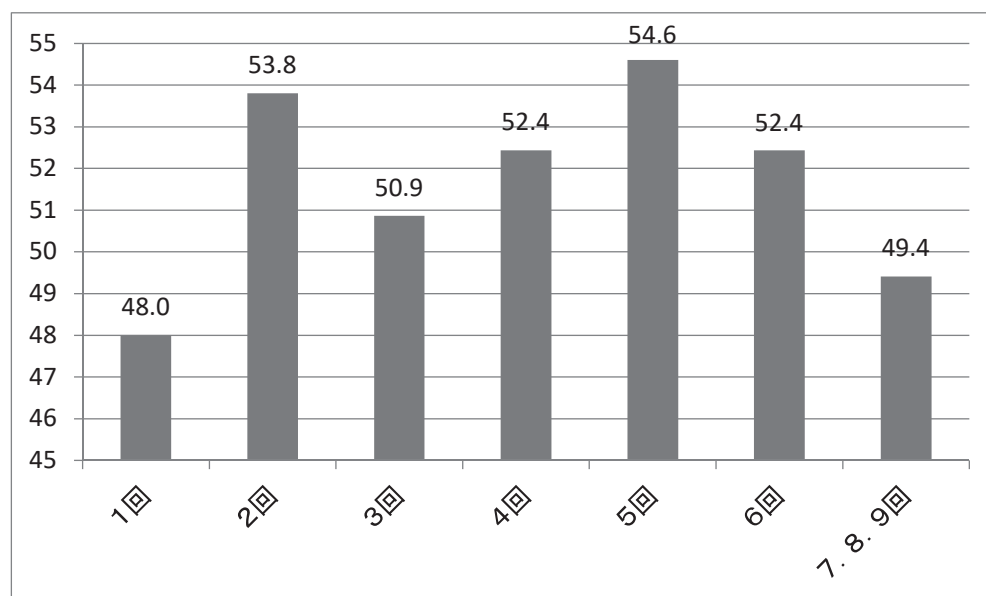


図6 参加回数別自己評価得点

### （3）最も参加回数が多い学生の事例分析

最も参加回数が多かった A（1 年生）の自己評価を分析した。月ごとの質問別の A の自己評価を表 1 に示した。考察しやすいようにシート内の 6 段階評価の数字を変換して考察した（1 → 6、2 → 5、3 → 4、4 → 3、5 → 2、6 → 1）。

A は、問 10「保護者と会話すること」の変動が特徴的である。保護者と会話することに対して A は、初回には「3：ややできなかった」とし、9 月には自己最低の「1：全くできなかった」、10 月は「5：かなりできた」、2 月に再び「3：ややできなかった」と回答している。A は 5 月には「子どもたちの楽しんでもらう」という目標をもっていたが、6 月には「いろいろな子どもにかかわる」「保護者の方ともかかわる」という目標をもっていた。しかしそれができないでいた。そのため 10 月には親子と会話が初めにできる受付の役割を選択した。そこで保護者とのスムー

表1 最も参加回数が多かった学生Aの自己評価

	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	合計
5月	3	4	3	3	4	4	3	4	3	3	4	4	42
6月	4	5	5	5	5	5	5	4	5	4	5	4	56
7月	4	4	4	5	5	5	5	4	4	4	5	4	53
8月	4	4	4	5	4	5	4	4	3	2	4	3	46
9月	4	4	4	3	4	4	4	4	4	1	5	4	45
10月	4	4	4	4	5	5	4	4	4	5	4	4	51
12月	3	4	4	4	4	5	4	3	3	4	4	3	45
1月	4	4	4	4	5	5	5	4	5	3	5	4	52
2月	4	4	4	3	5	4	4	4	5	3	5	4	49
合計	34	37	36	36	41	42	38	35	36	29	41	34	平均49

ズな会話ができたことから自己評価を高めたと考えられる。またAは、子どもに関しての質問で、問5「子どもに対してことばがけをすること」問6「子どもと視線を合わせてコミュニケーションをとること」、問11「子どもと楽しい会話をすること」の自己評価が高い。特に6月と7月の自己評価得点が高い。6月と7月は学生企画の共通遊び時間があり、とくにAは7月の共通遊びでキーボードを弾く役割をこなしたことが子どもとの関わりでの自己評価を高める要因であったのではないかと考えられる。また12月は、Aが共通遊びでの司会進行を行い、「うまく話をまとめて司会をすることができなかった」と感想を書いていることから、自己評価得点が低くなっていると考えられる。Aの事例から、参加する際に目標を持つこと、何かの役割を担うことが自己評価に関わりがあるのではないかと考えられる。

#### 4. まとめ

本研究は、地域の子育て支援事業である生駒市の事業「サンデーひろば」への学生派遣に際して、ボランティア・スタッフとして継続的な学生の参加を促進する手だてと、参加した学生にどのような学びの特徴があるのかを明確にすることを目的とした。参加した学生が毎回の事業後に記入した振り返りシートの分析結果として、年度後半に学生参加数が減少すること、1年生より2年生の自己評価が有意に高く3年生では自己評価が低くなること、参加回数が多くなると自己評価が低くなること、活動に目標や役割を主体的にもつことが自己評価に影響することが得られた。これらのことから、学生の継続参加を促進する手立てとして、ボランティア活動内容の魅力を高め、活動の中で学生が主体的に目標や役割をもつことが必要であり、自己評価をする比較対象に出会える多くの体験すなわち年間継続参加と4年間継続参加をすることが親子への理解や関わり方の視点に関する深い学びにつながると考察された。

#### 参考文献

- 伊藤美加：保育実践が保育者の自己評価に及ぼす影響、京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要、54、pp.157-163、2016-12
- 川瀬隆千：学生サポーター事業のプログラム評価、宮崎公立大学人文学部紀要、16-1、pp.45-62、2009-3
- 小山優子・福井一尊・白川浩：「ほいくまつり」活動を通じた保育者養成の意義（Ⅱ）－保育学科1・2年生の自己評価に関する比較検討から－、島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要、51、pp.15-22、2013-3
- 岡澤 哲子・清水 益治：事業へのボランティア参加学生の学びについて、帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要、1、pp.49-54、2016-3



竹之下 典祥・馬見塚 珠生：学生地域子育て支援ひろばへの参加による心理的变化の質的調査研究－SCAT 法導入による実習体験過程の理論的仮説生成の試み－、京都文教短期大学研究紀要、50、pp.70－81、2011

本研究は、「サンデーひろば」に1年生から4年生まで熱心に参加した岡澤ゼミの河盛雪鈴さんが2016年度卒業研究としてまとめたデータを基に、筆者が再分析し検討を加えたものです。彼女の継続的活動に対して、記して尊敬の念を表します。